

アーチルニュース ちえなっぴ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1
TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：arch1@luck.ocn.ne.jp
http://moc.istu.jp/n_town/hattatsu/index.html



「地域でくらす」ということ

ちえなっぴ第2号をお届けいたします。今回は「地域でくらす」ということについて考えてみたいと思います。

地域社会は人々が暮らす「場」であり、人と人との「かかわり」です。地域社会が私たちに見えてくるためには、そこにいる人々が、「一緒に何かできる、つながる、参加できる活動」が、常に展開されていることが必要です。この「共同する場・つながり」を「ネットワーク」と呼んでいます。

「ネットワーク」は自然にできることもありますし、意識してつくることもあります。いくつもの「ネットワーク」の中で、子どもも、大人も、高齢者も、必要な助けを得ながら、その人の個性を発揮し、その人なりの役割を果たしあっています。このことが「地域でくらす」ということだと思えます。

アーチルでは、スタートして1年4か月経過し、多くの成人期の障害者の方々と

出会うことができました。今回はその中から、お二人について、どんなことを求めて地域でくらすしておられるのかを紹介いたしました。このお二人だけでなく、これまでお会いした皆さんが、それぞれに「ニーズ」や「思い」を持って、前向きに生きようとされていることを日々の相談の中で受け止めさせていただいております。この方々が孤立せず、地域社会の一員としていろいろな活動に参加し、自分で決めたことやできることをして、家族や仲間と安心してくらすようになることがアーチルの目標です。

アーチルは、この方々とともに、地域の人々や関係者の方々と力を合わせて「ネットワーク」をつくりながら、大切な人生を豊かにしていくためのいろいろな「活動」をしていきたいと考えています。

仙台市発達相談支援センター
所長 末永 カツ子



就労できた自閉症の青年 加藤康司さん

(仮名：30歳台)は父母と3人暮らし。高等学校を卒業後、数か所の職場を転々とした。これまでの職場では自閉症という障害の特性を理解してもらえず、人間関係がうまくとれなかったり、臨機応変な対応が難しかったりで仕事を継続することができなかった。その後、求人誌をもとに何度も就職活動を行ったものの、すべて面接でダメだったとのこと。

今回、アーチルや障害者就労支援センターの相談等を経て、市内の清掃会社に就労が決まった。今後の本人及び家族の希望は、仕事を続けていくことと地域での自立した生活をしていくことである。

はたらくということ

経済状況の厳しいなかで障害者が仕事を得るためには、企業のいわゆる「福祉マインド」だけに期待するのではなく、より積極的なアプローチが求められている。知的障害者や自閉症者はその障害特性が理解されにくいために、職場から疎外されてしまうケースが多い。

ビジネスライクに捉える企業側に対しては、障害特性と持っている能力について理解が得られれば、障害者であっても戦力となり得ることをわかってもらえることになる。このことは障害者の就労先への定着へもつながる大切な要素である。

受け入れ企業の開拓は容易なことではないが、障害者雇用に関するさまざまな助成制度を活用しつつ、就労先の拡大・確保を進めることが必要と考える。

アーチルにおいても今後、より関係機関との連携強化を図りながら、企業側に対し障害者雇用への理解と障害特性理解のための普及啓発の役割を担っていくことが必要である。

自立して地域でくらすこと

親が健在であるなしにかかわらず、障害者が地域で自立して生活をしていくことは常に究極の目標となる。障害者の親亡き後については誰もが不安をいだく大きな問題である。親亡き後、障害者はいやおうなしに自立を求められる。

知的障害者が地域で安心して自立した生活をしていくためには、本人のニーズを実現するフォーマル及びインフォーマルな社会資源を結び付けていくケアマネジメントが重要となる。

知的障害者や自閉症者の場合、本人のニーズ把握が困難な場合が多く、ニーズを表明できるまでの支援も必要な場合もあり、多くの時間を要することも多い。本人の意志を尊重したケアマネジメントによる本人主体の支援によって、本人がエンパワーされ、自分で生活をコントロールする力を獲得し、最終的にセルフマネジメント(自立)できることが目標となる。地域における自立を支えるためには、「くらしの主体は本人であり、選択も本人がする」という基本的な考えに立った支援が大切である。

知的障害者が自立した生活を送る場として「単身でのアパート等での生活」「グループホーム」などが考えられる。アパート等

特集 成人期

大切な人生を豊かに生きたい

～エンパワメントを目指して～

誰もが、一度きりの人生を自分らしく生きたいという思いと、そのように生きる権利を持っています。一人ひとりの中にあるその思いを実現するために、時には誰かの手を借りながら、また地域社会の環境の整備を図りながら、その人が持っている力をより高めていき人生を豊かに切り拓いていく。「エンパワメント」という言葉にはそんな意味があります。

今回は「成人期」をとりあげ、アーチルが開所してから現在までのさまざまな相談でお会いした方の中からお二人を紹介し、「エンパワメント」をキーワードに「地域で豊かにくらす」ということを考えてみたいと思います。



自分の時間を豊かに過ごすこと

生活の質を豊かにし、本人をエンパワーする余暇活動はとても大切である。今野広子さんは、一緒にカラオケに同行してくれる仲間(ボランティア)を求めている。外出支援(ガイドヘルプ)というだけではなく、一緒に楽しんでくれる仲間を求めている。この願いを実現するには、共通の趣味を持つ仲間づくりを支援することや、柔軟に対応できるボランティアによる支援が必要である。アーチルにおいても仲間づくりを目的とした知的障害者のグループ活動を実施しているが、今後の地域での展開を目指し、生活支援センター等と連携を始めたところである。

一方、ボランティアについては、様々なニーズに対応できる多様なボランティアの養成が急務である。アーチルにおいても昨年度からボランティア養成をはじめたところである。今後は障害者とボランティアとの出会いの場をつくるなど、適切なコーディネート機能が求められている。

本人家族のエンパワメントのために

加藤康司さん、今野広子さんの希望を受けとめ、成人期を「地域で豊かにくらす」という側面から考えると「就労」「余暇活動」「地域での自立」「親亡き後の生活」などの課題が浮かび上がってきた。これらの課題に対してアーチルが取組もうとしていることは、本人主体のケアマネジメントに基づいた地域の様々な社会資源も含めたネットワークによる支援である。それは最終的に本人及び家族がエンパワーされ、地域の中で生き生きと安心して自分らしく生きていけるように支援していくことを目指していくことである。

アーチルでは、本人及び家族が地域で豊かにくらすようニーズの把握に努めるとともに、その実現のため既存の社会資源の再検討を行うことはもとより、必要とされる新たな社会資源の開発をも視野にいれながら、ネットワークの中で適切な支援が行えるよう、専門機関としての役割を果たしていきたい。



通所更生施設に通うダウン症候群の女性 今野広子さん

(仮名：40歳台)は高齢の母親との二人暮らし。自宅からバスで通所更生施設に通い、日々の作業を楽しみにしている。休日は知的障害者のための合唱サークルに通っている。本人のさらなる希望は、「一緒にカラオケに同行してくれる人がいればいいなあ」ということである。

母としては、自宅の側に所有しているアパートを「グループホームにしたい」と思っており、「自分亡き後も本人が地域でくらすしていければなあ・・・」と考えている。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch: 橋)」と「パル (pal: 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思っています。



♪～♪ わかり合える・だから元気がでるんです!～♪

＝療育グループから自主グループ「麦」が誕生しました＝

(代表 館石さんからのメッセージを紹介します。)

私たちの子どもは、幼稚園に通園しているけれど、お友達とコミュニケーションが上手にとれない・・・等の同じ様な心配事を持った子ども達でした。子ども達だけでは年齢相応のコミュニケーションをとる事は難しい状況でしたが、スタッフの上手な橋渡しや声かけがあり、楽しい時間を過ごし、回を重ねるたびにめざましい成長を見せてくれました。母親同士の話し合いではスタッフを交え、子どもの考え方や付き合い方を涙を流しながら話し合いました。

終了が近づき、とても居心地が良いこの会を継続していこうということになり「麦」が誕生しました。毎月第2木曜日の午前中にアーチルをお借りして、親だけで集まっています。現在は小1、年長、年中の母親11名ですが、その中にはアーチルの療育グループには参加していないけれど、同じ様な心配事を持っているということで加わった方もいらっしゃいます。毎回、情報交換し、近況を報告しあっています。堅苦しくない気楽に話せる・同じ様な悩みを持つ親同士だから分かり合える・アーチルのスタッフに話す程のことではないけれど誰かに聞いてもらいたい・・・とにかく何でもいいんです。親が月一回集まって話すことで少しでも気持ちが軽くなり、また明るく元気に子育てできる・・・そんな気持ちが沸きあがってくるサークルでありたいと思っています。



お知らせコーナー

モック

「MOCタウン」をよろしく!

アーチルのホームページが東北大学教育情報学研究所と共同開発した育児支援オンラインコミュニティ「MOC」(mothers open collage) タウン」の中に登場します。アーチルのことや自閉症などの発達障害のことが動画も交えて分かりやすく解説されています。仙台市のホームページからも直接MOCの「アーチル」トップページにアクセスすることも可能です。8月上旬に開設予定です。どうぞご覧下さい。

http://moc.istu.jp/n_town/hattatsu/index.html

ボランティア講座始まる!

平成14年度に引き続き、今年度もボランティア講座を開催中です。参加者の皆さんからは「発達障害について学びたい」「自分自身が支えられてきた部分もあり、その経験を活かしたい」などという声が聞かれています。

昨年度の受講生でアーチルボランティアに登録された方については、毎月一回定例会を開いて登録メンバーの親睦を深めたり、情報交換などをしています。また、今回の養成講座のための託児も行っています。

今後は、ボランティア活動の場を、アーチル主催の研修会や家庭訪問などと拡大していく予定です。



編集後記

アーチルからみなさんへ届けたいものは、一人ひとりの心にともされるあたたかな光です。真っ暗な周の中を、一筋の光を求めてアーチルへやってくる方がいます。その光は周りが暗いほどよく見えます。いつか、アーチルの光が周りの明るさにまぎれてしまうほど、皆さんの心にともされた光が大きく輝きはじめることを願っています。.....「ちえなっぶ」第3号は11月末ごろ発行の予定です。(竹中)

